

ブナ北限の里づくりとNPOによる エコツーリズムの推進

～黒松内のまちづくりとぶなの森自然学校～



エコツーリズムという言葉が知られるようになる前から、地域の自然環境、農業や農村風景、地域文化を潜在的な資源として位置付け、都市との交流を促進する体験型・滞在型のまちづくりを進めていたのが黒松内町です。同町には、ブナ・ウォッチングをはじめとする野外体験活動を行うブナセンターのほか、5年前に北海道自然体験学校を主宰するNPO法人ねおすの協力によって、交流と教育をキーワードにした黒松内ぶなの森自然学校が開校しています。ブナ北限の里である黒松内町を訪ねてみました。



ブナ北限の里づくり構想によるまちづくり

黒松内町は人口約3,500人、道南の渡島半島の内陸部に位置し、日本海と太平洋への直線距離はともに20数km、札幌市と函館市の中間点にあります。

黒松内町にある歌才^{うたさい}ブナ林は、1928年に北限のブナ自生地を代表するブナ林として天然記念物に指定されています。ブナは日本の落葉広葉樹林帯を代表する樹種で、かつて東日本一帯はブナ林で覆われていました。そして、人間は山菜やキノコや狩猟などブナの森の恵みを受けてきたのです。しかし、高度経済成長期に、木材としての価値が低かったブナはどんどん伐採され、ブナの自然林は残り少なくなっています。黒松内でも太平洋戦争末期に木製戦闘機のプロペラ材用に一部が伐採されそうになったり、戦後も町の財政事情から天然記念物を解除しようと

いう危機があったものの、学術的な価値を知る学者や地元住民の熱心な運動によって、今も原始的な姿が残され、葉の面積が大きい、幹がまっすぐで下枝が少ないなど、北限としての特徴あるブナが残っています。

全国各地でまちづくりという言葉が盛んにいわれるようになったころ、黒松内町でもさまざまな立場の人々が集まり、21世紀のまちづくりを検討しようと、'87年にまちづくり推進委員会が設置され、この委員会から「ブナ北限の里づくり構想」が提唱されます。この構想は、黒松内にある優れた自然環境やここで営まれている農業や農村風景、地域文化を潜在的な資源として位置付け、町民が誇りとする農村風景の創造と、都市との交流を促進するふるさとづくりを目指そうというもので、'89年に本格的にスタートしました。

この構想を推進する拠点施設として、'91年には自然体験学習施設「歌才自然の家」が、'93年に町内の自然と歴史などの地域情報を発信する博物館「ブナセンター」と、オートキャンプ場「ル・ピック」、特産品加工手作りセンター「トワ・ヴェール」がオープン。5年前には展示販売施設の「トワ・ヴェール（ドゥー）」と、構想に沿ったユニークな交流複合施設が整備されてきました。なかでもブナセンターは、初夏と冬に行われる「ブナ・ウォッチング」のほか、森のウォーキングや子どもを対象にした野外活動など、エコツアーの先駆けともいえる事業を行ってきました。今も年間延べ2万人ほどが訪れ、小学校の総合学習などにも対応しています。

黒松内町は、北限のブナ林が象徴するように、本州型と北海道型の自然の境界地であり、両者の自然環境を身近に見ることができます。また、低地の高層湿原であり、道内で最も形成年代の古い歌才湿原や瀬棚層の化石群など、研究者にとっても興味のある

※瀬棚層
道南の瀬棚～今金付近をはじめ、黒松内～函館の低地帯に分布する地層。主にれき岩、砂岩、シルト岩からなり、固結度の低い典型的な堆積軟岩。



黒松内ぶなの森自然学校のそばにある研修所は(財)宝くじ協会の助成で建設。



る資源があり、自然関連の研究者も多く訪れています。町内にある宿泊研修が可能な研究者用住宅を拠点に長期で滞在する研究者もいるといます。

構想がスタートして、徐々に交流人口が増え、また、数は少ないものの黒松内町に移り住む人も見られています。

黒松内ぶなの森自然学校の開校

札幌に本部を置く「NPO法人ねおす」の理事長で、'99年に開校した「黒松内ぶなの森自然学校」代表の高木晴光さんもその一人です。

ねおすは、専門学校形態の社会教育事業を行っていた社会総合研究所に勤務していた高木さんが、同所の関連事業として「北海道自然体験学校NEOS」を設立し、その後、独立した組織で、NPO法施行と同時にNPOの申請を行い、現在は自然学校やネイチャーセンターの運営受託や人材派遣、子どもから大人までの自然体験活動の企画、実施、エコツアープログラムの企画実施、自然活動や環境教育にかかわる人材育成など、自然と人だけでなく、広くまちづくりや地域づくりを意識した活動を行っています。

ねおすと黒松内とのかかわりは、今から7年ほど前。スタッフの一人が子どもたちを対象としたツアーでこのまちを訪れたことでした。当時、既に黒松内での取り組みは知られており、複数の人から「おもしろいまちがある」と聞いたといいます。その後、ガイド養成の一環として実習地の黒松内を訪れるよ



黒松内ぶなの森自然学校は廃校した小学校を利用した生涯学習館を再利用。問い合わせは0136-77-2012、ホームページはhttp://www.d2.dion.ne.jp/~buna_ns/。

うになり、ブナセンターのフロント業務にもかかわったことで、少しずつ関係が深まっていきました。

そして、'99年に環境省、黒松内町、(社)日本環境教育フォーラム、NPO法人ねおすの支援によって黒松内町南作開の生涯学習館(元作開小学校)を拠点に「黒松内ぶなの森自然学校」が開校します。自然体験活動を推進する全国の団体とネットワークがあった高木さんのもとへ、環境省と自治省が進める「自然体験型環境学習拠点(ふるさと自然塾)事業」の北海道の候補地について打診があったのです。いくつかかわりがあったまちに声をかけたところ、黒松内町が前向きな姿勢を示し、4カ年のモデル事業地区に選ばれ、モデル事業終了後の現在もねおすを中心となって運営されています。

ぶなの森自然学校では、子どもを対象とした長期自然体験学校や山村留学のほか、エコツアーの実施や研修事業を行っています。ねおすではここをOJT(on the job training)の場として位置付け、現在は研修生3名を含めた7名のスタッフが常駐しています。拠点である生涯学習館は、廃校を利用したこともあって、町営の宿泊施設などからやや距離がありますが、学校そばには宿泊機能を兼ねた研修所も建設され、宿泊を伴った野外体験活動も積極的に受け入れています。

本部が札幌にあるNPO法人ねおすの代表でもある高木さんが黒松内に移住したのは4年前。「ここに初めて来た時から居心地がいい地域だと感じていて、われわれも人材育成の実習地を探している時でした。タイミングがよかったこともあります。今思うと、ここには酪農を中心とする農業、近隣には水産業もあり、特徴ある自然もあります。研修所は第一種農地を転用したのですが、地元の農業委員会も非常に協力的で、そういった基盤と環境があったように思います」と黒松内の魅力を語ります。

地域とともに進めるエコツアーのために

ぶなの森自然学校には「どんなことができるか」「宿泊はできるのか」「料金は」など、直接問い合わせが寄せられます。今では札幌圏だけでなく、近隣町村からの参加者も見られています。

ぶなの森自然学校のエコツアーは、歌オブナ林のガイドだけでなく、町内を流れる朱太川でのカヌーや貝化石の採集、個人の所有地から黒松内のまちを眺めたり、ツアー参加者限定で地元の食材を生かして地元レストランのシェフが作った特製弁当が注文できるなど、地域にこだわった体験メニューがそろっています。「異次元を作り出すのではなく、暮らしに連動したツーリズムでありたい」と高木さん。「地域と共に」というキーワードを大切に、「交流」と「教育」に視点を置いたエコツーリズムを実践する場がぶなの森自然学校といえます。

一方で、大量の人を受け入れるマスツーリズムとは違って、エコツーリズムを推進していくためには、発地主義の観光ではなく、地元にお金が落ちる着地主義の仕組みを検討しなければならないといえます。例えば、グリーンツーリズムではファームインなど、規制緩和が進んだのに対し、エコツーリズムの場合はまださまざまなハードルがあります。

ねおすでは、同法人が運営する自然体験学校と道内でエコツアーを実施する団体とともに、オーダーメイドのエコツアーができる「エコツアーシステム北海道」という個人事務所を支援する体制を整えています。「地域のサイズに合わせた特徴あるものを発信するには、その地域から発信していかなければなりません。旅行代理店が募集する大人数のツアーではなく、5、6人でも催行できるようなもので地域のためになることを考えていくことがエコツーリズムではないかと思うのです」と高木さん。ねおすの存



黒松内町のほか、東川町、弟子屈町、登別市などにもねおすのスタッフが常駐している。「エコツーリズムは地域づくりにかなり近いもの」と高木さんはいう。

在は、組織ではなくネットワークと考えてほしいといひます。「自然といつても植物や動物、子どもと大人など、興味の対象は非常に広い。自然体験活動にかかわる人がモチベーションを維持しながら仕事を組み立てていくときに支えあって進めていく共同プロジェクトを『ねおす』と呼ぼうと考えているのです」。

地域に密着したエコツーリズムを展開するには、従来の概念を取り払って、新しい視点で考えていくことが重要であることを感じさせます。

これまでの歴史を生かしたまちづくりを

ふるさと自然塾モデル事業の間は、ブナセンターが持っている地域情報をぶなの森自然学校に提供するなど、ブナセンターと自然学校は兄弟的な存在でしたが、現在は活動分野や参加対象者が徐々に分離し、それぞれの持ち味を生かした活動を継続しています。

ブナセンターは博物館活動の一環として小中高校を対象とした授業や総合学習の受け入れ、各種研修の企画、実施、大学教官や学生を対象にした調査研究の補助、自然ガイドの指導などを行い、これらの窓口として学校教育部が設置されています。小中学校などの「教育」としての自然体験環境プログラムなどは、博物館の公的使命であり、他自治体からの依頼も区別せずに可能な限り協力しています。

一方で、黒松内町が環境とともに力を入れている福祉の面で、養護施設を対象にした事業をぶなの森自然学校で運営するなど、行政の手の届かない分野をアウトソーシングする機関としてぶなの森自然学校は機能しています。また、各省庁のモデル事業など、ねおす側が積極的に情報を収集し、行政と連携して申請を行い、自然学校の事業として組み込んでいくケースもあります。

ブナ北限の里づくり構想には、エコツーリズムという言葉はありませんでしたが、この構想にはエコツーリズムの考え方が根底にあったといひます。ブナセンターの高橋興世センター長は「今でもブナ・ウォッチングなどをエコツアーとは呼んでいませんが、今になって考えるとこれまでの取り組みはエコツーリズムという言葉に当てはまるのかもしれない。リゾート運営とは違うので劇的ではありませんが、交流人口が増えることで、町内で消費をして、少しでも経済効果が上がる。でも、その程度でもいいのです。それを長く続けていくことで、地域の活性化に少しでもつながる。高木さんもその一人ですが、本当にファンになってくれた人が移住してきたケースもあります。これも一つの効果だと思います」といひます。

ブナ北限の里づくり構想を指針にした黒松内での取り組みは、大掛かりなリゾート投資や派手な集客施設を伴うことなく、地道に地元の資源を活用しながら安定的な地域発展に結び付けていこうというもので、自然保護意識の高まりのなか、エコツーリズムの推進や環境教育を進めていく上で他の地域も学ぶべき貴重な経験だといひます（政府の食料・農業・農村政策推進本部の「立ち上がる農山漁村」の全国30モデルにも選定）。

地域の資源を見つめ直し、背伸びをせずに地道にまちづくり構想を進めてきた黒松内町ですが、'06年3月を目途に、支庁を超えて長万部町との合併が議論されています。地道に進めてきたまちづくりの指針が大きく転換されてしまわないか、懸念する声もありますが、これまでの歴史を踏まえ、ブナ北限の里づくり構想を生かし、その延長線上にあるまちづくりを目指してほしいといひます。



図書館や工房もあるブナセンター。